

地域活性化事業交付金

活用事例集



相模原市 緑区

目 次

地域活性化事業交付金とは	1
--------------	---

橋本地区

1 コミュニティカフェ（地域食堂）	3
2 おもちやの広場による多世代交流	5
3 福祉カーニバル in 橋本	7
4 「相原地区の文化財めぐりマップ」及び「相原の歴史」の復刻版（一部加筆）事業	9
5 健康づくり普及活動運動	10

大沢地区

6 「大島水場のヤツボ」バリアフリー化事業	12
-----------------------	----

城山地区

7 しろやま土曜寺子屋活動	14
8 若葉台を含む城山地域の防災・減災プロジェクト①	16
9 みんなの津久井湖夏祭り	18
10 しろやま☆おせっかい	21
11 あつまれ～ しろやまっこ！	23

津久井地区

12 米・大豆等の栽培で持続するまちづくりを目指す事業	25
13 自然災害伝承事業	27
14 津久井湖周辺創生事業	29

相模湖地区

15 わくわく・さがみこ創り	31
16 小原地区元気いっぱい花いっぱい環境整備事業	33

藤野地区

17 FUJINO コミュニティ・フォト・プロジェクト	35
18 藤野お惣菜地美恵	37
19 葛原集会所前休憩所改修工事	39
20 赤沢環境整備プロジェクト	41
21 しのばら園芸市	43
22 藤野農林福藝連携プロジェクト基盤整備	45
23 リレートークの会	47
24 風の森学び舎～風と水の流れる森づくり	49
25 藤野定期便	51

地域活性化事業交付金とは

■地域活性化事業交付金とは、より多くの市民の参加と協働による地域の活性化を目指し、本市のまちづくりを進めてきた22の地区で展開される市民による自主的な事業に対して交付される交付金です。

■対象事業

- | | |
|----------------------------------|-----------------|
| ・地域の防災・防犯に関する事業 | ・地域福祉の増進に関する事業 |
| ・地域の保健・健康づくりの増進に関する事業 | ・産業や観光の振興に関する事業 |
| ・環境の保護・保全に関する事業 | ・青少年の健全育成に関する事業 |
| ・地域の文化・伝統の振興に関する事業 | ・生涯学習に関する事業 |
| ・地域及び地域活動の情報発信及び広報に関する事業 | |
| ・区が推進する重点事業 | |
| ・その他地域のコミュニティづくりを目的とし、区長が特に認める事業 | |

■優先的な交付対象事業

- | | |
|----------------------|---------------------|
| ・自治会への加入促進 | ・地域における公共的な活動の担い手育成 |
| ・公共的な活動への参加者増加 | ・地域の公共的な活動団体間の連携強化 |
| ・まちづくり会議が提示した地域課題の解決 | |

■交付対象とならない事業

- | |
|---|
| ・政治活動、宗教活動又は営利活動を目的とする事業 |
| ・交付申請を行う年度において、相模原市が実施する他の補助制度等の対象となる事業 |
| ・政策提案又は講座等の開催を主たる目的とする事業 |
| ・調査、研究を主たる目的とする事業。ただし、地域の活性化に資する事業に繋がる計画があるものを除く。 |
| ・第三者への事業促進を求める事業 |
| ・前各号に掲げるもののほか、区長が適当でないと認める事業 |

■交付金の申請者は、原則として交付金の趣旨に合致する事業を行う5人以上の構成員で組織される団体とします。申請にあたっては、事業を実施する地区の各まちづくりセンターへ事前にご相談ください。

■当該年度の事業実施期間は、4月1日から翌年3月末までとします。また、同一の事業に継続して交付する場合については、3年を限度とします。

■ 交付金は、次の経費を交付対象とし、その交付率は10分の10以内とします。

- ・ 事業に要する消耗品費、郵便代等の通信費、印刷製本費等
- ・ 事業を行う上で必要な食糧費（交付対象者の構成員に対するものを除く。）、備品購入費、施設使用料、備品借上料等
- ・ 事業を行う上で必要な施設等の光熱水費等
- ・ 事業を行う上で必要な委託費等
- ・ イベント等の開催時に掛ける保険料、警備費等
- ・ 講演会等の講師に対する報償費
- ・ 研修会の旅費等、研修に要する経費（交付対象者の構成員個人の資質向上に対するものを除く。）
- ・ その他事業遂行に必要な経費であって区長が必要と認めるもの

※備品（物品等で1件1万円以上の財産）にかかる経費の交付率は、対象経費の3分の2以内となります。

団体名：かまどカフェ

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

独居や日中独居の高齢者が散歩や犬の散歩をしている姿をよく見かけるため、お話を伺うと「行動範囲も狭くなり、他者と接する機会が少ない」「食事は一人でとることが多い」「誰とも話をすることがなく寂しい」「近くで食事等を楽しむ場所がない」という意見をいただいた。

2 事業の目的

地域の集いの場を設け、多世代の方々が気軽に参加出来る場所を作ること、食を通じて、地域の方々との交流を深め、活動することにより、地域との交流・結束を高めていくことを目的としている。

3 事業の実績

毎月第二木曜日に地域の方々の集いの場所として地域食堂「かまどカフェ」を開催し、昼食とおやつをワンコイン程度の価格で提供した。天候にも恵まれ予定していた11回を無事に開催できた。毎回30人を超える地域の方が来られ、提供する食事も40食前後となっている。

さらに、地域食堂とは別に第4水曜日の午後にも飲み物とお茶を提供する「プチ・かまどカフェ」を9回開催した。地域の中で根付いていることを実感している。



4 事業の成果

地域の集いの場として認知され、食を通じた繋がりが継続出来ている。独居・高齢者世帯の方だけでなく、子育て世帯のお客様も少しずつ増えており、情報交換や多世代交流の場となっている。

顔なじみの関係が出来つつあり、お客様同士で顔を見せない方を心配したり、近況を報告し合ったり、次回会う約束をする姿も見られる。

「毎回楽しみ」と言うお声もいただき、介護サービス以外のインフォーマルな場として、地域に貢献できていると感じている。



5 事業実施団体による自己評価

ランチタイムの「かまどカフェ」以外にも、夜間帯や喫茶のみの開催を試すことができた。（夜間帯は断念、喫茶のみは「プチ・かまどカフェ」として開催）かまどカフェは、食がメイン、プチ・かまどカフェは、ゆっくりお喋りする場という形ができつつある。

参加者もボランティアスタッフも高齢の方が多く、のんびり無理なく楽しく行っている。



アンケートで値段、量、味付け等のご意見も伺い、概ね好評だった。頂いたご意見やご要望を今後の運営に生かしていきたいと考えている。

6 今後の展望

今後の展望としては、季節を感じて頂ける食事やイベントを企画したいと思っている。アンケートで好評だったメニューを提供するなど、地域の方の声も反映していきたい。

プチ・かまどカフェ（お茶とおやつのための開催：ゆっくりお喋り出来るような会の開催）では、地域で活動されている方と一緒にワークショップ等の企画も考えている。協力していただける参加者、ボランティアの数も増やしていきたいと思っている。

また、天候や気温を気にせず開催出来る場所を探している。



おもちゃの広場による多世代交流

橋本地区

団体名：おもちゃの広場はしもと

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

近隣との交流が少なく、地域での助け合い、相互扶助の精神が希薄になっていると感じた。子ども達はじっくり考える、自然な遊びをする経験が不足していると思う。これらの事は学習の基礎であり大切であると思う。

そして、子ども達は、オンライン、スマホゲーム等に偏った遊びをしている。これらのオンラインゲームへの依存は、「ゲーム障害」と病名が付くほど深刻化している。

また、この1年で気が付いたが、自治会の意義が認知されず自治会への参加が低下しているのを残念に感じた。



2 事業の目的

地域での助け合いが希薄になっていると共に、どうしても同じ世代の人との付き合いが多くなりがちと感じる。老人、親、子どもの幅の広い世代交流は、お互い考え方が違うため自ずと柔軟になる。そして、老人は活気を、親は安らぎの時を、子どもは福祉の学びを得ることが出来ると思っている。

おもちゃは心を、思考を豊かにする。カプラという積み木は、立体物を作ったり壊したり思考錯誤することでそれらを養う。将棋の藤井9段が幼少の頃に遊んだキュプロは、創造力を鍛える。そのおもちゃで地域のお子さんに遊んでもらいたいと思う。

アナログなボードゲームで遊ぶことで、コミュニケーション力がつき、スマホに頼らない遊びを楽しめるようになる。各地でボードゲームの紹介が盛んになっている。橋本でも年齢を超えて遊びやすいボードゲームを紹介したいと思っている。

おもちゃの広場を自治会館で開催することで、自治会を身近に感じてもらい、意義を伝えていきたい。

3 事業の実績

遊んで多世代交流を目指した「おもちゃの広場はしもと」も2年目を迎える。ようやく参加者も増え安定してきて、幼児、その親、シニアの皆さんと楽しい時を共有している。4月に「福祉フェスティバル」に参加して、生活リハビリクラブの方と知り合えて活動を広げるきっかけになった。この時、木楽舎の積み木も譲っていただいた。

橋本三丁目新町自治会館（毎月第4土曜日午前10時～12時）では11回開催した。1回あたり17名程出席で、計190名が参加してくださった。8月には「木のペンダント」、12月クリスマスイベント「くっつきクリスマスツリー」のワークショップ、2月には、「木と和紙のおひな様」のワークショップを実施。どれも大変好評をいただいた。7月に初めて橋本公民館で広場を開催、参加者は12名だった。公民館での開催は早めにチラシを作り掲



示していただいたが、良い告知が出来ず新規参加者は無く残念だった。8月から月1～2回生活リハビリクラブ（デイサービス）に11回出張し、120人のシニアの方にボードゲームを楽しんでもらった。老人クラブの余興や1月にいきいきサロン（25人）にも出向いてボードゲームで遊んでいただいた。

4 事業の成果

橋本三丁目新町自治会館では、おもちゃ・ボードゲームでゆったり遊び、終了15分前に普段目にしない大型絵本を読み、皆で後片付けを行った。アットホームな雰囲気のなか幼児、その親、シニアの多世代交流ができた。親御さんから、シニアの方が子供と優しく遊んでくださって嬉しかったと、シニアの方からは子供の笑顔や仕草で癒されたとの感想をいただいた。生活リハビリクラブやいきいきサロンでは、ボードゲームがシニアととても相性が良く、いきいきと楽しんでもらった。リハビリにもつながったと職員の方々からも喜んでいただいた。

5 事業実施団体による自己評価

広場運営も少しずつ慣れてきた。参加者の皆さんから楽しかったと言ってもらい、感謝している。スタッフの皆様にも感謝している。ワークショップの実施も子供たちの見守りをしながらできるか不安だったが、数量限定で無理せず出来た。幼児のお友達は遊びに来てくれるが、小学生以上は、習い事があり参加できないようである。オンラインゲーム、スマホゲームに魅了されている小学生たちにコミュニケーション力を鍛えるボードゲームや協力して大きな造形物を作る積み木（木楽舎）の遊びを伝えたいと思いながら、成果が出ていない。小学生が広場に来られないのだったら、児童館での開催も視野に入れながら活動が続けていきたいと思う。次のボランティア世代に引き継ぐ用意もしていかなければならないと感じている。

6 今後の展望

今後は、安定した参加料を頂戴できるようなイベントを開催したい。

橋本三丁目新町自治会館を拠点に、他の橋本地区自治会館でおもちゃの広場を開催し、「おもちゃの広場はしもと」をアピールしたいと思っている。



団体名：福祉カーニバル in 橋本実行委員会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

私たちは、以下の4つの目的を達成するために活動を始めた。

- ① 障害や介護を受ける方々が当事者として社会参加できる機会を創出したい。
- ② 橋本地区の福祉サービス事業者でどのような運営がされているか情報の公開が少なく、選択する時に当事者に公平な情報が行き届かない。
- ③ 年間通して、春先にはイベントが少ないことと、高齢者や障害者でも気軽に立ち寄れる小規模なイベントを開催したいと考えた。また、地域の福祉職員が在駐しているイベントを創ることで気軽に質問ができる環境を提供したい。
- ④ 子育て世代が多い橋本地区で実施することで、若い世代にも地域福祉に取り組んでいる事業者を知ってほしい。

2 事業の目的

介護保険サービスや障害福祉サービスがより地域に浸透することや、事業所同士ひいては事業者と市民同士で顔が見える関係づくりを図り、困りごとの相談がハードル低く、円滑に行えるように地域福祉の発展への寄与、活動を継続していくことで、小さな悩みや相談を考えた際に立ち寄りやすい地域づくりを実践していきたいと思っている。

3 事業の実績

令和6年6月2日（日）に橋本公園とサン・エールで「福祉カーニバル in 橋本」を開催した。

当日の出店者は15団体、推定来場者数は500人であった。

初回のイベントとして多くの方に参加・来場いただけるイベントになったが、ゲリラ豪雨に見舞われ、1時間前倒しの終了にはなったものの、活気あふれるイベントになったと思う。



4 事業の成果



イベント当日は、重度障害児の親子や、身体・精神当事者単独、若者サポートステーションの利用者を始め多くの福祉職にご来場いただいた。

ボランティアでは橋本高校の福祉委員会の生徒も参加し、一般の客層も含め多くの来場者を迎えられた。

また、このイベントを通じて数年ぶりに会えた市民が数組いたり、他の地区でもカーニバルを開催してほしいとの声もいただいた。



5 事業実施団体による自己評価

最後は悪天候に変わったものの、実行委員会に福祉領域ごとの団体が加入し、今回の活動趣旨を叶えるイベントになったと感じ、結果成功と言えると思っている。

6 今後の展望

令和7年度も「福祉カーニバル in 橋本」を開催したいと思っている。

今後の反省点としては、より多くの団体に参加していただくこと、さらに当事者と市民の交流になるよう活動機会を増やせる仕組みを作っていくこと、今後も活動を継続ができるように協賛を募っていくことである。

課題を解決しつつ、市民にも福祉職にも共感を得る活動にしていきたいと思っている。



「相原地区の文化財めぐりマップ」及び「相原の歴史」の
復刻版（一部加筆）事業

橋本地区

団体名：相原の歴史をさぐる会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

相原地域で生まれ育った人たちはもとより、他地域から相原に移り住んで来た人たちにとって、相原を故郷（ふるさと）として、地域の歴史を知することは、私たちの暮らしを活力あるものにするためには、大変重要なことだと思っている。

2 事業の目的

相原の歴史をさぐる会が研究・調査した内容をまとめた「相原地区の文化財めぐりマップ」と「相原の歴史」の改訂版を新たに制作し、地域の歴史・文化財に関心を有する人たちに対して配布、図書館への配架や小中学校に対して学習用教材として活用してもらうことで、地域への歴史と文化の伝承を図ることができると考えている。

3 事業の実績

相原の歴史をさぐる会の中に、「相原地区の文化財めぐりマップ」作成班と「相原の歴史」作業班と2班体制で編集作業を行った。

「相原地区の文化財めぐりマップ」は5,000部を制作した。主に歴史講演会、成人学級、歴史関連団体等で配布、公民館等の公共施設での配架、相原地域近隣の小・中学校の児童・生徒へ配布を行う。

「相原の歴史」は100部を制作した。主に歴史講演会や成人学級等で配布を行う。



4 事業の成果

歴史講演会、成人学級や歴史関連団体等で配布による啓発活動を行うことにより、地域の歴史や文化に興味を持つ人が増え、地域の担い手の育成に繋がると考えている。

また、相原地域の近隣小、中学校に配布、学校での地域文化学習への協力活動することにより、地域の歴史や文化に興味を持つ児童・生徒が増え、故郷（ふるさと）の愛着を生まれ、将来の担い手の育成にもつながると考えている。

5 事業実施団体による自己評価

相原を故郷（ふるさと）として、地域の歴史をまとめ、残すことは地域の文化・伝統の振興に貢献でき、また、故郷（ふるさと）を知ることによって、私たちの暮らしを活力あるものにしてきたと思っている。

6 今後の展望

相原は、今から900年前の平安時代末から鎌倉時代初め頃、武蔵の国（現在の八王子市周辺）を本拠地としていた武蔵七党の一つである横山党が相模の国（相模原市周辺）に進出し、横山党の一族が栗飯原（あいはら）と名乗った地である。

ぜひ今回制作した冊子を手にとっていただき、この郷土について一緒に調べてみませんか？



団体名：健康づくり普及活動同好会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

人生100年時代、高齢者の認知症及び介護予防に関心が高まっていることから、脳の活性化と筋力低下予防の運動、食育と社会参加の機会を作り、併せて、足腰が弱くなりがちなため、転倒予防のための健康体操を行うものである。

事業を行うに当たっては、事業に賛同する方、自治会、老人会や地域包括支援センター（閉じこもり防止／講師要請等）との協調を図り、予防活動を展開していく。



2 事業の目的

認知症（コグニサイズ）及び介護予防（フレイル）の周知と、これらを予防する健康維持運動を行い、健康づくりを目的としている。

3 事業の実績

「コグニ健康講座」で脳（頭）を使って運動するための正しい知識の講義と、正確な技術運動を習得することにより、認知症・フレイルの周知、転倒予防などを実施した。

毎月第4金曜日13時30分～16時00分実施、各回とも「コグニ健康体操」を基本に認知症予防の替え歌、喜劇川柳の朗読、「もの忘れの進行を緩やかにするために！」と「フレイル予防」また「お口の健康（口腔ケア）」の専門講師による講義と実技講座の成果判定のため「体力測定」を実施した。

4 事業の成果

会場の広さから定員20名に変更し、各回とも平均16名の参加があった。

5月に1回目を開講し、11月の7回目までは13～15名くらいが参加。12月の8回目以降からは17名～21名が参加、定員を超えるまでに至った。

「コグニ健康講座」の活動内容が周知されたのか、令和7年度の申し込みに30名の応募があり、定員を30名（会場が狭いとしつつも）に変更し、参加者の希望を受け入れる事にした。

参加者からも「活動内容が良い」「最初は簡単だと思っていたが、脳（頭）を使う筋力運動に全身が刺激、終われば爽快さに楽しめ、継続して参加したいのでこの講座を続けて欲しいと要望があった。

5 事業実施団体による自己評価

健康づくり普及活動同好会の組織を結成し、自治会を中心に、老人会や地域の住民に「コグニ健康講座」の呼び掛けをし、参加も回を重ねるに従い、参加者の健康に対する意識は高くなり、参加者も徐々に増えて、この事業を始めて良かったと感じている。

指導者や雑務に携わる人数が少ないのが今後の課題で、活動内容的には、相原地域包括支



援センターの外部専門講師の派遣や、実技指導、相模原市健康づくり普及員（相原地区と城山地区）の指導もいただき、募集定員を超えようとする人気に安堵している。今後も、参加者が笑顔で楽しく参加しやすい講座環境の整備に努めていきたい。

6 今後の展望

今後も活動を実践し、参加者が継続して自身の健康維持に関心を持ってもらえるように、体力測定の実施（一定期間運動を行って、自身の体力がどの位置にあるのかを自覚してもらう）や、参加者同士のコミュニケーションが図られるよう、楽しく運動ができる体制を構築していきたい。



「大島水場のヤツボ」バリアフリー化事業

大沢地区

団体名：水場ヤツボを守る会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

【大島水場のヤツボの背景・現状】

- ・平成18年に市登録史跡に登録されている
- ・大沢地区に3か所あるヤツボの1つとして市民に認知され観光資源となっている
- ・季節には二輪草や紫陽花の花が咲き地域の散策路として親しまれている
- ・水場ヤツボの水は2年に1回水質検査を実施し、災害時は煮沸して飲料水としても使用できる
- ・水場ヤツボを守る会により、定期的に清掃活動が行われ美観が維持されている

【大島水場のヤツボの課題】

- ・道路からのヤツボに至る通路の入口部分については、降雨後は土留めから流出した土により足もとが滑りやすくなるため、訪れる人や清掃活動をする者が転倒をしかねない状態になっている。
- ・通路の階段については、コンクリートで整備されているものの、階段の段差が高いため高齢者や子どもの上り下りが困難で、転倒した場合は非常に危険な状態にある。



2 事業の目的



バリアフリー化により、大沢地区の貴重な地域資源である大島水場のヤツボの見学者と、憩いの場として大島水場のヤツボを利用する地域の人々の安全を確保し、より賑わいのあるものとするこ
ことによって地域の活性化を図る。



3 事業の実績

「大島水場のヤツボ」への入口部分を整備することができ、降雨後に足もとが滑りやすくなるという危険な状態が改善された。

4 事業の成果

清掃活動や見学者等の安全性が高まったことにより、大沢地区の貴重な観光資源である「大島水場のヤツボ」をより賑わいのあるものとすることができた。

5 事業実施団体による自己評価

「大島水場のヤツボ」を、より賑わいのあるものとすることで、地域の活性化を図ることができた。



6 今後の展望

入口部分が改善されたが、階段部分についても、今後手すりを設置するなど、バリアフリーを進めることで、さらに観光資源としての価値を高め地域の振興に貢献していきたい。



しろやま土曜寺子屋活動

城山地区

団体名：しろやま土曜寺子屋実行委員会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

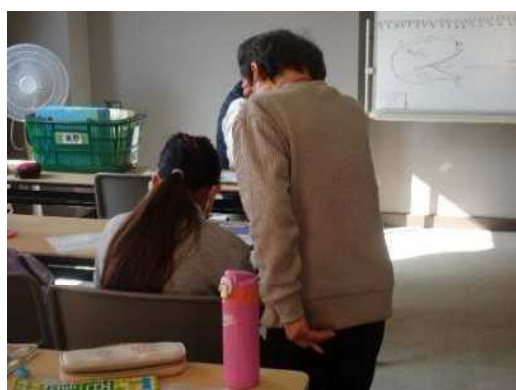
子どもたちが学校での学習を通して、もっと広く深く学習してみたいと思ったり、逆に苦手意識を持つようになっていたりしていると思われる。

そこで、小学校時代という早い段階から地区内のそういう子どもたちに対して、地域の大人たちができる支援に取り組みたい。

また、地縁的なつながりや共通の価値観が希薄化しており、地域のコミュニティづくりの必要性が高まっている。



2 事業の目的



地域の子どもは地域で育てるという考えのもとに、地域の子どもたちが進んで学習しようとする場と機会を提供し、地域の大人たちが子どもたちに寄り添いながら学習の支援をするという具体的な活動を通して、子どもたちと子どもたちに寄り添う大人たちとのコミュニケーションづくりをする。また子どもに寄り添う大人同士のコミュニケーションづくりなど、希薄になっていると言われている地域の絆づくり、人と人との関係性、すなわち地域のコミュニティづくりを促進することを事業の目的とする。

3 事業の実績

令和6年6月の第一土曜日から令和7年3月末まで、原則的に毎週土曜日の午前中2時間、城山公民館を会場に実施することができた。また、ボランティアも数名の参加があり、子ども一人ひとりに丁寧に対応できる環境を整えることが出来ている。そのため、事業の目的である、地域の子どもたちに子どもたち自身が進んで学習しようとする場と機会を提供することが可能となっている。

4 事業の成果

ボランティアの地域の大人たちが、子どもたち個々に寄り添いながら学習の支援をすることで、参加する子どもたち同士や子どもたちとボランティアさらにボランティア同士のふれあいやコミュニケーションづくりが着実に深まっている。



5 事業実施団体による自己評価

参加する子どもたちの中には学習の苦手な子どもたちもいるが、子どもたちのペースに合わせて学習を進めていくので、継続して参加する子どもがいる。子どもたちに寄り添いながら進めることで無理なく継続できることを評価したい。また、子どもたちとのふれあいから、



子どもたちの話し相手となることで、良き相談相手の存在となれることも評価したい。

6 今後の展望

年度初めに城山地区の小学校へ依頼し、保護者とその子どもたちへ寺子屋活動の紹介を配付させていただいてスタートしたが、次年度も年度初めに同様に案内を配付し、活動の周知を図りたい。

併せて地域内に寺子屋紹介のポスターを自治会や各事業所などに掲出をお願いしたが、次年度も同様にお願いし、周知を図りたい。



若葉台を含む城山地域の防災・減災プロジェクト①

城山地区

団体名：若葉台住宅を考える会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

城山地区は地域住民の防災意識が高いとはまだ言えず、現状では災害時に生き残るための行動や助け合うためのつながりがつくれていないのが現状である。

さらに、高齢化率が約60%の若葉台地域においては、多世代の防災コミュニティづくりや防災意識の向上に加え、個々にあわせた避難計画の策定、地域内外の防災ネットワークづくり、そして次世代の担い手の育成が急務である。

そこで、能登半島大地震発生を教訓と捉え、専門家による防災・減災対策として実践型の学ぶ場（講座やワークショップ）を設ける。そこで過去



に起きた被災地支援を行った経験や情報を得る事で、生き残るための知識や知恵、技を身につけると共に地域内外の防災ネットワークづくりと地域の防災力の向上をはかる。

未来に起きる可能性が高い関東直下型大地震や豪雨災害の被災による「死者0」を目指し、子育て世代～高齢者までの多世代で防災・減災を学ぶ機会をつくる。

2 事業の目的

多世代向けの防災イベントや講座・ワークショップを通じて、住民ひとりひとりが“「もしも」から「いつでも」の備え”をしてもらい、地域全体の防災意識の向上を図る。また地域内外（若葉台・城山地区・周辺地域・全国各地）の多世代による防災コミュニティ×防災ネットワークづくりをすることを目的にこの計画を実施する。そして、3年計画で城山地区において防災活動に関する多世代の担い手作りを事業の最終目的とする。



3 事業の実績

5月26日に若葉台小栗公園であそぼうさい（防災展示ワークショップ）を行い、若葉台及び近隣、近県から600人が来場した。

3月1日にあそぼうさい part 2（のむ・くう・だす）を若葉台自治会館で行い、能登



令和6年度 緑区 地域活性化事業交付金 活用事例

の災害支援状況報告、非常食の炊き出し訓練、非常食の試食、食器作り、非常トイレの実地使用、防災用品の実際の試用説明を行い、60人が参加した。

4 事業の成果

地域の住民に対して防災意識を高め、災害備蓄品の必要性を強調、いざという場合での自助努力の必要性をわかってもらえた。子ども達には学校外での非常事態に対応する技術を指導できた。

電気、ガス、下水が使えない場合の一週間の対処方法を実体験してもらえた。

このイベントで高齢化団地である若葉台に多くの若い家庭が来てくれ、子ども達の声があふれ非常ににぎわったのは、とても嬉しいことだった。



5 事業実施団体による自己評価

多くの他団体の協力を得て、概ね計画案を実施できた。11月2日はPART2イベントを計画していたが、地元小学校の運動会と日程が重なってしまい延期にしたのは、事前リサーチ不足であった。

6 今後の展望

令和7年度は、従来支援してくれていた客寄せのためのポニーの団体が若葉台に来ることができず、現時点で開催日は未定である。形式を変えての防災講座を行うことを検討中である。



みんなの津久井湖夏祭り

城山地区

団体名：みんなの津久井湖夏祭り実行委員会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

- ① 津久井湖城山公園（水の苑地）は、城山地区の中で代表する風光明媚な観光スポットであるが、地区外の方の知名度が低く、津久井湖城山公園（花の苑地）に比べ観光施設が無いことや、イベントも少ないことから観光客が少ない。このことから水の苑地を活用したイベントを実施することにより、地域の魅力を発信し、知名度の向上を図り、地域の活性化につなげていく。
- ② 旧津久井郡は深刻な人口減少と高齢化が進んでいることから新たな魅力を創出する必要がある。
- ③ 城山地区では各地域において様々なイベントが開催され、多くの地域においてスタッフの高齢化が進み、イベントの縮小や廃止がおきていることから、若手のリーダーや地域における公共的な活動の担い手の育成が必要である。



2 事業の目的

- ① 本イベントを通じて津久井湖（水の苑地）とその周辺の美しい里地里山の魅力と城山地区の伝統文化を知っていただく。
- ② このイベントは若者が中心になって、広くボランティアを募り、市民参加型のイベントを目的としている。（実行委員長が20代男性、実行委員会メンバーの半分は女性）。また、大学生のボランティアも昨年は60名と多かった。本イベントを通じて若手スタッフが育ち、地域における公共的な活動の担い手となって活動することを目指す。
- ③ 出店は一般公募とするが、地元の飲食店に声掛けし優先的に出店していただき、地域の経済活動の活性化の一助となることを目指す。
- ④ 本イベントを城山のイベントから緑区全体のイベントとなるよう城山地区以外の出展者、イベント参加者に広く広げて行く。また、城山地区以外の団体とも本イベントに参加していただき、地域の活性化を目指す。



3 事業の実績

- ① 来場者数：9,200人
- ② 当日のボランティア数：95人



- ③ みんなでごみ拾い：41人
- ④ 出展者数：テント出店23店、キッチンカー出店12店、企業・縁日出展13店
- ⑤ ステージ参加団体：10団体
- ⑥ スカイランタン：ランタン数120個
- ⑦ ビンゴ大会：200名参加
- ⑧ 花火大会：150発（5分）
- ⑨ 風鈴まつり：200個

4 事業の成果

- ① 昨年度の「第2回みんなの津久井湖夏祭り」の来場者8,500人に対し、今回は9,200人に増加した。また、知名度が上がってきたことにより城山地区以外の来場者の増加が目立った。
- ② 今年度は実行委員が30名に、ボランティアも95名と揃い、その中心が20～30代でイベント開催の大きな力となった。
- ③ 今年度も「イベントの安全と交通渋滞回避」を目標にかかげ、警備員を要所の危険箇所へ、そしてボランティアの方々には交通誘導や園内警備をお願いした。また、駐車場を増やし川尻小学校から相模原城山高校前までの定期シャトルバスを倍增運行したことにより無事故・無渋滞を実現できた。
- ④ イベントを持続可能なものとするために広く事業者や個人の協賛を募り、協力いただいたことにより、計画通り花火や多くのスカイランタンを打ち上げ、そして今年度は「風鈴まつり」の開催も実施することが出来た。

5 事業実施団体による自己評価

出店数やイベント数を増やし、花火やスカイランタンの打ち上げもあり、前回を超える9,200人の来場で会場は終始盛り上がりを見せた。前回の最重要課題であった「安全の確保と渋滞の回避」については無事故・無渋滞を達成できた。また、実行委員やボランティアス



タッフの充実により「ランタン・キャンドルn i g h t」やビンゴゲームを学生ボランティアに担当していただき運営が楽になった。今年度も有志による「津久井物語」の発表により津久井湖の歴史を紹介できた。知名度が上がってきたことにより協賛していただいた会社（人）が増えてきていることから、本事業が自走できる足掛かりを作ることが出来た。

6 今後の展望

「みんなの津久井湖夏祭り」にもあるように本イベントが沢山の人の手で計画・実施される幅広い年齢層による手づくりの地域に根差したイベントとして成長してきている。今年度



令和6年度 緑区 地域活性化事業交付金 活用事例

は、95名のボランティアの学生と30名の地域ボランティアの協力があつた。来年度は、地域住民・企業・大学生に加え、高校生や中学生を巻き込んだイベントとなるよう進めていく計画である。内容的には城山地区の歴史・文化、そして豊かな自然を紹介し、他イベントと差別化することにより夏の風物詩となるよう特徴のあるイベントにして、遠距離からの来場者が行ってみたいと思うようなイベントに成長していきたい。



しろやま☆おせっかい

城山地区

団体名：城山地区まちづくり会議 高齢者とともに築き支える地域づくり部会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

城山地区では、高齢者サロンや健康体操など、地域における交流活動が活発に展開されている。しかしながら、生活様式や個人の価値観の多様化などにより、自治会、シニアクラブ、その他さまざまな交流活動の場など地域社会との直接的な関わりを持たない高齢者も増加していると感じている。そうした中、地域社会との積極的な関わりを望まない人に対しては、誰かと繋がっているという安心感が得られるようなゆるやかな見守りの仕組みが必要であると感じ、令和2年度に「みんなで気づかいあうまち・城山」そんな“おせっかい風土”を広めようと考え、異変に気付くためのポイントを示したチラシ「しろやま☆おせっかい」を民生委員児童委員協議会の協力により城山地区内各戸に配付した。



2 事業の目的

城山地区内の住民が少しだけおせっかいになり、周囲への直接的な声かけのほか、目配せや気配りによる間接的な見守りの意識を醸成し、地域全体に浸透させ、誰も取り残されない、取り残さない”しろやま☆SDGs”の街を形成するため、今回は城山地区の住民の方々と



実際に地区内を回り、まちのいろいろな表情（風景）を眺めながら、周囲への声かけと併せて、声かけによらない目配せ・気配りによる異変の有無の確認などを通じて“おせっかい風土”をさらに広め根づかせる。

3 事業の実績

- ・おたがいさまの縁づくりを4回開催した。
- ・当日は延べ参加者71名、スタッフ9名で運営し、特に事故もなくスムーズに実施することができた。
- ・おせっかいスゴロクを作成し、城山地区全世帯に配布をした。

4 事業の成果

小学校区別に地区内をウォーキングし、居住エリア以外を知る機会となった。ウォーキン



グ後、自治会館内を借用し、見聞した身近なおせっかい、体験したゆるやかなおせっかいの気づきを発言することで、参加者間で共有し、また模造紙にポストイットを貼付しスゴロクに仕上げ、おせっかい風土をわかりやすく広める機会となった。

回を重ねることで、地域を跨いで知り合いになることができ、おせっかいの気づきに知らんぷりができない風土を醸成することができた。

5 事業実施団体による自己評価

事業参加者同士が顔見知りとなり、声をかけ合い、あいさつする関係となっている。自治会長には自治会館借用の協力を快諾される等、今後につながる縁ができた。

ゆるやかなおせっかいをする関係づくりや、その行動を見てくれている人との繋がりができ、おせっかい風土が広まっていると感じた。



6 今後の展望

しろやま☆おせっかいに参加した延べ68人のつながり“縁”を断ち切らないよう、おせっかいバンダナを委員等で配布し、仲間となり、年数回マイおせっかいの談話や、困ったことなど、話し合いの機会を持ち、共有したい。おせっかいの縁をいつまでも続けていきたい。



団体名：城山地区まちづくり会議 子どもたちの主体性を育む地域づくり部会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

かつて、子どもたちの社会性の基礎となる「人との関わり」は、近隣の子どもの交流や、家庭の中での兄弟同士の交流の中で、遊びを通して自然に身に付いてきた。大きい子どもは小さな子どもをいたわり、守る。小さな子どもは大きな子どもに感謝し、憧れる。そんな関わりの中で、ゆっくりと育まれてきた。

しかしながら、地域の人間関係の希薄化が進み、近所づきあいや親戚づきあいも減少し、少子化によって兄弟数や地域の子どもの数が減ってくる中で、子どもたちが「人と関わる」ことに自然に慣れ、「人と関わりたい」という思いを自然に感じとっていく、そんな場も機会も失われてきているように感じられる。

こうした状況の中、城山地区まちづくり会議では、部会を設置し、「既存の伝統行事や観光資源などを生かし世代間・地域間交流を進めるとともに、子どもたちが主体性をもって地域に関われる仕組みづくり」をテーマに検討を進めてきた。



2 事業の目的

近年、少子化の進行による子どもの減少に伴い、地域での同年齢・異年齢のさまざまな子ども同士のふれあいが少なくなり、地域における多様な子ども集団の形成が難しく、城山地区のほとんどの地域は育成会の活動が縮小している、子どもの社会性などの育成面で困難な状況が生じている。



このような状況下において、城山地区の観光資源などを活用し、子どもたちの主体的・自主的な取組を通して、子どもたちの異年齢・世代間の交流を図り、その活動を通して、子どもたちの社会性や主体性を育むとともに地域への理解を促し愛着心を育てることを目的とする。

3 事業の実績

- ・城山地区の各小学校に出向いてモルック体験会を実施した。
- ・「あつまれ～ しろやまっこ！」当日はスタッフ含めて60名が参加し、モルックを活用した異年齢、世代間交流を図ることができた。



4 事業の成果

- ・参加した子どもたち全員がアンケートで「モルックが楽しかった」と回答している。
- ・城山地区全4校の小学校から子どもが参加し、「他校の人と仲良くなれた」「大人の人と話ができた」ということから、関わる機会が少ない他の小学校の子どもや大学生、大人と交流することができた。
- ・「大人だけでなく一緒に考えたい」という発言があったことから、部会が目指している“子どもたちの主体性”が芽生えたことに手応えを感じた。

5 事業実施団体による自己評価

- ・城山地区在住の全小学生対象に事業を実施するのは初めてだったが、子どもたちのために長時間かけて丁寧な計画、準備をして当日はとても盛り上がり無事に終了できた。
- ・委員それぞれの経験を活かして協力し合い、他団体とも交流できた。特に、法政大学ソーシャル・イノベーションセンター学生プロジェクト「しろやまふれんず」の協力がなければ事業の実施は難しかった。
- ・事業内容をモルックにしたことにより、初対面でも世代を超えて交流でき楽しむことができたので、とても良かった。



6 今後の展望

モルック終了後の子どもたちのアンケートの回答や意見を踏まえ、子どもたちの主体性が発揮できるような事業内容を検討・実施していきたい。

地子連との連携をより深め、共に活動しながら取組が継続していける方法を考えていきたい。



米・大豆等の栽培で持続するまちづくりを目指す事業

津久井地区

団体名：農園会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

上青根集落は生物多様性に富む自然豊かな里山にある。2021年G7サミットで合意された“30by30”の目標エリアの認定に値する場所である。だが、住民の高齢化と人口減少に伴い、人間の活動領域と野生動物の生息エリアとの境界線が曖昧となり、鳥獣被害が増加してきた。

これらの因果関係を改善し活力ある地域を再生するには、地域外の人々と手を携えて協働事業を展開することである。誰でも親しめる農作業を通じて「交流（関係）人口」を増やすことにより、地域の活性化・持続化を図る。

2 事業の目的

- ・住民有志の力で耕作放棄地と野生動物による農作物への被害を防ぎ、里山の自然環境を保全する
- ・会員のほか、一般有志との協働、他の団体との提携により、相模原産の酒米や、津久井在来大豆を栽培し、酒米は地産の酒として地元の酒造会社に醸造を依頼したり、大豆は企画したイベントで参加者に味噌を作ってもらったりして、関係人口を増やし、地域の広報・振興に努める
- ・以上の事業を通して、会員（住民）・一般参加者・団体が協力し合うことで人流を盛んにし、地域全体に活気をもたらす

3 事業の実績

「青根酒米づくりの会」として、神奈川トヨタ、同レクサス事業部の支援を受け、協働事業として展開してきた。軌道に乗ってきたが、鳥獣害対策として設置し昨年、効果が発揮されたメッシュ防護柵であったが、今年、イノシシにより酒米が致命的な被害を受けた。

また、大豆も高温障害と鳥獣による食害を受け、酒米・大豆ともに収穫ゼロという残念な結果となった。

その結果を受け、メッシュ柵にトタン板を取り付け、鳥獣害対策を強固なものとした。



猪による被害を受けた酒米

4 事業の成果





令和6年度は収穫ゼロという結果を受け、徒労感や虚無感を味わったが、鳥獣害対策を改めて真剣に取り組む機会が生まれ、会員同士の結束は強固なものとなった。

連携団体との協働（酒米づくり）や協力（水路の管理、農機具の融通）も円滑にできるようになった。

また、上青根で農業活動を行うグループや個人が徐々に増加し、交流も盛んとなり、イベント（味噌・蕎麦づくり・文化祭）などで地域は賑わいを見せている。

獣害対策を講じる様子

5 事業実施団体による自己評価

酒米・大豆が鳥獣による食害等によりほぼ全滅となってしまったのは、不本意であるが、上青根を拠点に活動するグループや個人との交流により、地域の活性化を図ることができた。



そば打ち(左)と味噌づくり(右)の様子

6 今後の展望

今後とも地区内外の団体や有志と連携・協働し、さらに人的交流を盛んにしていく。そして、事業に持続性を持たせるため、単に作物の栽培にとどまらず、収穫物を販売し収益の一部を事業の運転資金に充てるなどにより、交付金に頼らない自立への第一歩とするほか、引き続き、過疎化・高齢化の進む地域を活性化させる役目を全うしていきたい。



自然災害伝承事業

津久井地区

団体名：自然災害伝承碑「地震峠」を守る会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

令和3年12月21日に「自然災害伝承碑」として登録された馬石地区の「地震峠」は、大正12(1923)年9月1日に発生した関東大震災により、死者16名、埋没棟数9戸の被害を受けた場所であり、当該地には、16名の慰霊碑のほか、被災した一家の慰霊碑と地藏尊が並んでいる。

過去の大規模な自然災害箇所であり、令和4年度から始めた本事業が拡がりや深まりをみせ、さらに将来を担う若い世代に継承していく重要性がある。

2 事業の目的

過去の大規模な自然災害に学び、防災・減災を目的として自助、共助、公助の意識を高める。

3 事業の実績

- ・地域のシンガーソングライターに作っていただいた楽曲“地震峠と十六の瞳”を「つくい地域・防犯の集い」で小中学生に合唱していただくことができた
- ・神奈川県立津久井高等学校の漫画研究部卒業生による漫画の朗読劇を発表したほか、同校の漫画研究部により大型看板の製作をし、地震峠に立てることができた
- ・神奈川新聞の記者が昨年から鳥屋学園生にスポットをあて、神奈川新聞の減災新聞の一面に掲載された
- ・昨年度作成した地震峠の漫画は、防災国体へ出展時に防災担当副大臣に読んで頂いたほか、国土地理院から地震峠を守る会の活動について応用地質学会で発表をしていただいた



高校生が地震峠の漫画を作成している様子



学生が地震峠について地域の人から学ぶ様子



4 事業の成果

- ・鳥屋学園では、総合学習のテーマで取り上げていただき、防災についての学びの中で、「考震力」という造語や防災チェックシートを作成し、後輩や地域住民に伝えることが出来た
- ・津久井高等学校の漫画研究部が考案した看板を地震峠に立てることができた
- ・新聞等のメディアを通じて、市内外に地震峠の事を発信することができた

5 事業実施団体による自己評価

- ・若い世代が過去に起きた災害を自分のこととして学び、防災・減災の必要性を感じてもらうことができた
- ・この活動を通して、地震峠で起きた出来事を後生に繋げることができた



高校生が作成した漫画を
慰霊碑近くに設置しました

6 今後の展望

関東大震災から100年目の節目をスタートとし、継続した活動を進めるために自然災害伝承碑「地震峠」を守る会を中心に、伝承碑の毎月の清掃などの活動を通じて、今後も伝承活動を継続していく。



津久井湖周辺創生事業

津久井地区

団体名：津久井湖周辺創生実行委員会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

津久井地区は、少子高齢化や人口減少などにより、地域活力の低下が深刻化している。

さらに、津久井地区は、相模原市の4割弱を占める面積を有し、自然と都市の魅力を持ち合わせながらも、広大であるがゆえ、地区としてのランドマークが見い出せていないなどの課題を抱えている。他方、リニア中央新幹線が開通する沿線地域ということを強みに、地域の一体感を高め、相模原市はもとより、県内の名所を創出し、愛郷心を育むことや来訪者を増やすことを目指す必要がある。

2 事業の目的

昭和63年に、子どもたちが立派に成長することを願い、大空を泳ぎまわっていた昔懐かしい鯉のぼりを、自然に恵まれた魅力ある相模川に群泳させ、人と人との出会いとふれあいの場を提供するとともに、子どもたちに夢や思い出を与える。さらに、平成31年に終了した中央区田名の『泳げ鯉のぼり相模川』の継承と津久井湖で群生しているブラックバスの新たな視点での観光資源化を両立するため、黒い鯉のぼりをブラックバスに見立てた津久井独自となる鯉のぼりの里を創生していく。

また将来的に、津久井湖城山公園内（花及び水の苑地）の間の湖上にワイヤーを渡し、鯉のぼりを群泳させ、新たな相模原市の名所とすることを目的として、津久井地区のみならず、相模原市の魅力に貢献し、シビックプライドの醸成に寄与する。

3 事業の実績

- ・津久井湖周辺（花の苑地）に2回（5月、3月）、鯉のぼりを掲げた
- ・鯉のぼりで地域おこしをしている他県市町村（埼玉県加須市）を訪れ担当者に事業の説明を受ける視察をした



津久井湖畔での鯉のぼり掲揚



埼玉県加須市、加須未来館の鯉のぼり展示



4 事業の成果

- ・市民、県民に津久井湖の存在を再認識してもらうことができ、今後の活動の方向性が論じられた
- ・他市の事業の内容・普及効果などを勉強し、今後の活動に生かせる有意義な活動ができた
- ・鯉のぼりを掲げたことによって、津久井湖に対する市民のシビックプライドを感じさせることができた

5 事業実施団体による自己評価

市民・県民に津久井湖の存在を再認識してもらうことができ、今後の活動の方向性が論じられ、事業初年度にしては、まずまずの事業展開ができた。

6 今後の展望

- ・“こいのぼりの里”としての機運の醸成を図る
- ・城山など津久井内外の関係機関と連携し、津久井湖周辺の一体感の醸成を図る
- ・相模原市のみならず、県内を代表する名所とする
- ・津久井湖は神奈川県民の水がめとしての役割を担うことから、水源地の大切さをアピールする役割に寄与する



団体名：相模湖地域連絡会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

相模湖地域では現在、人口減少が問題となっている。

この問題を解決するために地域全体で活性化を行い、人口流失を抑止し、人口増へ繋げていく。

その為には、地域住民との対話を行い、将来の生活・財産の不安・地域の発展の不安を活動を通して払拭していきたいと考えている。



2 事業の目的



本会が魅力あるまちづくりを目指す活動を行い、地域の多くの個人・団体と活動を共にすることで、地域住民が参加意識を高めて大きな人の繋がりを形成し、住みよい町・楽しみのある町としていくことを目指していく。

3 事業の実績

① ポスター部会

地域会レター、ポスター・チラシの製作

② イベント部会

10/26 第3回さがみ湖 Halloween Party 主催

11/3 本陣際 運営補助

11/16・17 いちょう祭り 地域PRのため参加

③ 桜道構想部会

12/14 整地

3/16 植樹



4 事業の成果

今年度は、年を重ねて相模湖地区内での当会の知名度が増し、一層積極的に地域活性化に寄与することができた。また、地域内の小学校へのボランティア活動の講演等により、活動の範囲も拡大できたことは未来の人への橋渡しの一環と考える。多くの団体への理解を一層得ることで、互いの情報や活動の共有強化がスムーズにできたことは、更なる相模湖地区の活性化に貢献できたと考える。



5 事業実施団体による自己評価



定期誌の地域会レターで多くの方へ活動報告を周知することができた。地域住民のみならず、他の団体からのインタビューや小学校での記念授業等を昨年行ったことは、当会の活動が外から評価されていると認識している。

今後もさらに地域の振興と、より良い相模湖地区づくりを目指していきたい。

6 今後の展望

植樹や、地域の文化事業・催しや高齢者への外出支援等の活動を継続し、地域内外に相模湖地域会の認知を広げることができた。活動を通じて、多くの団体や個人との繋がりを生かして、各イベントや活動を盛り上げていくことが、町全体の活性化・発展につながると考えており、そうした活動をこれからも継続していく。



小原地区元気いっぱい花いっぱい環境整備事業

相模湖地区

団体名：小原草木会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

各地に甚大な被害をもたらした令和元年東日本台風により地域の心の拠り所・憩いの場である小原地区の八幡神社の階段が全面的に崩落し、地域住民にとっては暗い影を落としたが、令和6年11月に地域一丸の努力により階段修復工事が完了した。この復興を契機に相模湖と小仏・城山や高尾山を繋ぐハイキングコースであり、小原本陣を核とした小原宿の魅力を最大限に引き出すべく、小原地区周辺の環境整備を望む声が地域で高まっている。



2 事業の目的



上記の状況から地域自治会総意のもと地域の有志を募って「小原草木会」を立ち上げ、まずは小原宿甲州街道沿いで地域の憩いの場所である「小原ふれあい広場」の現在桜が植栽している法面を整備し、草花を植えることで地域住民が明るく・元気になるとともに、ハイカーや小原宿を訪れる観光客の観光スポットになることにより、地域が活性化することを目的とするものである。

また、現在小原で進めている、中山間地域振興モデル地区の取組と併せた、魅力の創出・発信を行っていききたい。

3 事業の実績

・小原ふれあい広場の法面整備

小原地域の有志を募って、小原ふれあい広場の法面の整備を行った。

・小原ふれあい広場の花植えによる景観整備

小原地域の有志を募って、小原ふれあい広場の景観整備のための花植えを行った。



4 事業の成果

地域の憩いの場所である「小原ふれあい広場」の現在桜が植栽している法面を整備し、草花を植えることで地域住民が明るく・元気になるとともに、ハイカーや小原宿を訪れる観光客の観光スポットとしての整備を行った。

5 事業実施団体による自己評価



観光に資する事業であり、現在小原で進めている、中山間地域振興モデル地区の取組と併せた、魅力の創出・発信を進めていく一助となった。

6 今後の展望

小原地区は、小原宿本陣を中心とした観光（地域）資源の豊富な地区である。一方、少子高齢化が顕著であり、津久井地域（津久井、相模湖、藤野）の重要課題である中山間地域対策を進めて行くうえでも、魅力ある街づくり、住んでみたい街づくり等が欠かせない地域である。そこで、小原自治会総意のもと、地域の魅力向上の一歩として地区内に住む協力可能なメンバーを中心に小原草木会を立ち上げ、まずは小原ふれあい広場周辺の環境整備を進める計画とした。今後は、これを皮切りに地域の関係団体などとも連携を図りながら、地域の担い手の育成に重点を置いて、小原地区の他の場所においても魅力向上アップに繋がる環境整備を順次進めていきたいと考えている。



団体名：FUJINO コミュニティ・フォト・プロジェクト

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

共同代表であるフォトグラファーが、外国人居住者として地域の幅広い住民から温かく受け入れてもらえた自身の体験から、多様で寛容な藤野のコミュニティの魅力や人々の“豊かな”生活風景／スタイルを写真媒体を通じて切り取り、より多くの人に伝えることができればと考えた。



2 事業の目的



特定のテーマに沿ったフォト・プロジェクトの実施を通じて、地域の人々がつながり、絆を深めることを目指す。また、視覚的に伝わりやすい写真の特性を活かし、SNS や写真集製作・発行を通じて当該地域の魅力をより多くの人に伝える。この地域に暮らす人々のありのままの生活風景を収めることで、地域や住民の記憶や文化を共有し未来へと伝える。

3 事業の実績

事業実施初年度となる本年度は、本プロジェクトの周知と協力者の獲得を目的として、複数のイベント実施や広報物やウェブサイトの作成等の周知活動を展開した。最終的には2つのシリーズのために其々13組、6組の撮影協力者を得て、合計35回以上の取材・撮影を実施、600点を超える写真を撮影した。3月には、撮影協力者そして地域住民も交えたイベントをシリーズごとに実施し、プロジェクトの成果の共有と写真やイメージを通じた創造的な交流の場を創ることができた。

4 事業の成果

本プロジェクトは、写真及びイメージという表現媒体を通じて地域住民の日常自体を創造的で美しいものとして捉え直すための視点を提示し、イベントの実施を通じてそれぞれのテーマで地域住民の対話や共感の場を創り出した。誰もが日常の美しさの創造主であることへの気づき、個人の記憶・物語の集積から、個人を超えた過去から現在まで息づく藤野地域や日本の伝統や文化に光を当てた。



5 事業実施団体による自己評価



いずれのシリーズの協力者やイベント参加者からは、プロジェクト自体やワークショップの内容について非常にポジティブな反応が多く寄せられた。

お米にまつわるプロジェクトでは、当初意図していたドメスティックな視点から日本人にとっての米文化や精神性など、より大きな視点へと対話が広がった。今後、編集作業と並行して継続して取材を進め、本事業で何を伝えるべきかを明らかにしていきたい。

家族にまつわる制作については、協力者による創作が素晴らしかった。次年度も、協力家庭に向けたワークショップを再度計画していきたい。

6 今後の展望

- ・引き続き、特定のテーマに沿ってフォト・プロジェクトを実施する。
(制作・編集、関連イベント・交流会の開催等)



藤野お惣菜地美恵

藤野地区

団体名：藤野お惣菜地美恵

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

- ・藤野地区の野菜を宣伝すること。
- ・藤野地区以外で地産の野菜が消費されている。
- ・近年獣肉が畜肉より健康に良いとのブームで人気があるが、高い確率で食中毒の危険性を持っている。



2 事業の目的

- ・藤野地区で栽培された野菜また季節に採れる山菜等を活用し獣肉と一緒に料理する事で地産地消を目指し拡販する活動。将来的にはジビエも地産地消を目指す。
- ・神奈川県猟友会津久井支部、相模原市、JA 神奈川つくいに協力を求め、新たなジビエ開発を目指し地域活性化に貢献する。
- ・料理教室で獣肉の怖さを厚労省のガイドラインに沿って安全な調理を習得する事で食中毒の未然防止を図る。

3 事業の実績



- ・藤野中央公民館、日奈澤工房にて地域住民を対象に1回12名程度の料理教室を年間6回開催した。（参加者延べ53人）

4 事業の成果

延べ参加人数が53人だった。毎回満員となり年齢層が、小学生から80代と幅広い参加であった。このような食べ方があったのだと好評で、家で食べたいとレシピを持ち帰られた。ほとんどの参加の方々は地元からの参加で、地元の食材を使用した料理教室で地産地消を目指す趣旨に貢献出来たと考えている。



5 事業実施団体による自己評価



LINEグループ、地元掲示板で募集したが、締め切り前に定員一杯となり好評であった。補助金を活用して料理教室で必要な機材を購入した事により、レシピの幅が広がった。まだまだ必要な機材があるので、参加者のご意見を聞き機器を増やしてさらなる高見を目指したい。

6 今後の展望

地美恵とは『地元で採れるおいしいめぐみ』という意味。この言葉のとおり、藤野地区で栽培された野菜また季節に採れる山菜等を活用し、獣肉と一緒に料理する事で地産地消を目指し、拡販する活動を行っていきたい。



葛原集会所前休憩所改修工事

藤野地区

団体名：葛原有志の会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

葛原地区は、藤野園芸ランドをはじめ、市道沿いに野外環境彫刻が点在する芸術の道、気軽にハイキングが楽しめる低い山々、神奈川の銘木100選の正念寺のしだれ桜などがあり、四季を通して観光客に親しまれて、休日や行楽シーズンには、都心から約1時間で当地に来られることから多くの観光客が訪れている。



このような中、休憩所は経年劣化による腐食が激しく、観光客の利用に適さない状況となっていることから、去年は屋根の改修を行い、今年は休憩所の鉄骨塗装替え、照明器具等の交換、シンクの浸透枳の設置を行いたい。

2 事業の目的



傷んだ休憩所を改修することにより、観光客等が安全、安心して利用できる環境を作り、この葛原地区にまた来ていただけるような空間としたい。

3 事業の実績

傷んだ休憩所の鉄骨塗装塗替え、照明器具等交換、シンクの浸透枳設置を行った。

4 事業の成果

今回、傷んだ休憩所を改修したことにより、観光客等が安全、安心して利用できるようになった。

また、休憩所周辺の環境整備も行っていることから、また、この葛原地域に遊びに来ていただける空間が整った。

5 事業実施団体による自己評価

傷んだ休憩所の改修ができて、観光客等この施設を利用する方々が気持ちよく利用できる様になり大変良かった。





6 今後の展望

相模原市、市観光協会等が当地区の観光スポットをPRしていただけることから、休憩所を改修することにより、観光客の来訪、利便性の向上に繋げるとともに、地域の知名度を上げていきたい。



赤沢環境整備プロジェクト

藤野地区

団体名：上野久保 杜を守る会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

赤沢周辺の山や沢は、2019年の台風19号の被害により、斜面の崩落、倒木などがあつた。集落の市道、住宅がある側は整備されたが、山や沢はそのまま放置され、金剛山山道へ続く遊歩道は登り下りが難しく、沢は崩落や倒木などで塞がり、山は土が乾燥して崩れやすく笹も多く生えて藪化し、樹木も育ちにくく荒れた環境になっている。

また、災害につながりかねないという懸念、登山や地域で散歩される方が山に再び安全に安心して入れるように遊歩道を整備したい、山や沢の状態を健全な状態に戻したい、などの声が地域で上がり、昨年1月から上野久保住民有志が中心となって、林業や森の再生活動をする人たちに協力を仰ぎながら、このプロジェクトを始めた。地域住民による日々の手入れに加え、月2回作業日を開催。地域の方、藤野の他の地域から、また都内からも参加いただき作業をしている。1年間やってきたことで、再び赤沢で登山道へ出入りする方も増え、崩れやすかった斜面にも実生や、植物が生え始め、変化が見られるようになった。



2 事業の目的



- ・赤沢、上野久保地域の森、山、沢が、安全で、健全な状態を取り戻す。
- ・赤沢の森に入る方が増え、近隣の山からのハイカーの行き来も増える。
- ・小さな道具を使ってできる整備の仕方を身につけて、自分の身の回りの環境でその技術を生かしてもらう。
- ・住民自らの手で地域の自然、環境を守る動きが、各地に広がっていくこと。そんな活動を始めようとする人たちを支援する。

3 事業の実績

毎月2回の作業日を実施。作業する場所を昨年より広げて、崩落斜面の修復だけでなく、その周辺への手入れ、沢の整備なども多く行った。

継続して整備をすることで、自生植物の繁殖など森の環境が良くなっている様子、自



然の中に起きている変化、乾燥してザラザラと土が崩れやすかったところが崩れにくく、安定してきたことを実感した。

4 事業の成果

- ・毎月地域の方へ森の作業の進捗状況、ご案内などを配っているため、活動が認知されてきた。
- ・ハイキング、散歩などで森を歩く方、グループなども増えて、階段が整備されことが助かると感謝の声があった。

5 事業実施団体による自己評価



参加人数が少なくなっていることはあまり改善できなかったが、活動は定期的に継続して行い、少しずつ整備を進めることができた。今年度は、皆で起きていることを観察し、どう整備したら良いかを一緒に考える時間もより持つことができた。作業を継続する中で、土が多く出てしまい置き場がなくて困る、作業をした場所を猪に崩されてしまう、資材置

き場が使えなくなる、などいろいろ起きたが、その都度工夫をし、起きていることを学びにつなげて対処していったことが良かった。

6 今後の展望

- ・継続して赤沢の森、沢の整備を続けていき、徐々に範囲を広め、集落内他の崩落斜面の修復作業や、山道の整備も進めていく。
- ・周辺の集落へつながる集落内、崩落斜面への吹付法枠工事後の地域での管理のため、これまでの実績を生かし、地域の方を巻き込みながら環境に助けになる方法で階段作りを行う。
- ・同じような活動を始めようとしている人たちと繋がり、応援、情報交換などを行う。



しのばら園芸市

藤野地区

団体名：しのばら園芸市実行委員会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

里山、中山間地域として長く人手が入らなかったことによる森林の荒廃、耕作放棄地の増加、それによる獣害、また地域に雇用がないための若者離れ、地域の高齢化、過疎化が進んでいる。



2 事業の目的



地域の森林資源を活かした商品開発、販売イベントの開催により、環境美化、都会からの人の呼び込み、観光資源・産業の創出などの地域活性化と次世代につなげる永続的な地域、環境づくりを行う。

3 事業の実績

- ・ 4月20、21日園芸市開催
- ・ 4月～3月 月1～2回会場整備
- ・ 月1回実行委員の定例ミーティング
- ・ しのばら園芸市ウェブページ制作、チラシ制作、各種デザイン
- ・ 獣害環境対策として会場整備にて耕作放棄地の開拓、やぶの切り開き

4 事業の成果

園芸市は2日間で入場者延べ500人ほど。

篠原地区地域住民との協働作業、藤野地域内のものづくり、飲食サービスを提供する人たちの協働、連携、青山学院大学シビックマネジメントセンターとの協働、学生ボランティアの受け入れをすることができた。



5 事業実施団体による自己評価



概ね今年度予定していたことは実現達成できたかと思う。

より多くの参加者が増えるようこれからもウェブ等で発信していきたい。

6 今後の展望

- ・引き続き、篠原地区内の活動団体である『篠原の里』などと連携するとともに、地域住民の賛同と合意を得ることにより、活動できる森林フィールドの増加、資源の提供、活動への参加者増加を図る。
- ・地域資源は、都市部等のフラワー、グリーン、クラフト系の事業者にPRし、地域活性化を図る。



藤野農林福藝連携プロジェクト基盤整備

藤野地区

団体名：藤野農林福藝連携プロジェクト

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

藤野地域は中山間地帯であり、耕作放棄地となった畑や、自然と人家の境が接近してきており、鳥獣害被害の増加がある。また、手入れのされていない森林等（主に植林されたスギ・ヒノキ）が多数あり、台風19号による土砂崩れの原因の一つとなっている畑や山の整備の必要性は非常に高い。

また、人的な要素としては、高齢者率は約40%と高く、障害者福祉施設の数も他地域に比べると多い。施設としては都心部等と比べて就労の機会が少ない点なども課題としてある。

地域特性としては、芸術村構想から30年あまり、野外彫刻なども多数あり、また日帰りのハイキング客などの流入もある。これらの要素を組み合わせ、障害者や高齢者の活躍の場を作りつつ、地域の課題を芸術的な視点で解決していきたい。



2 事業の目的



日本の障害者率は7.4%あり、活躍の機会がまだまだ福祉の充実した国に比べると少ない。SDGsの視点も含めながら、藤野地区での様々な活動においては芸術を課題解決にいかし、誰もが助け合え、輝ける地区を目指していきたい。

3 事業の実績

2024年6月10日、9月22日、2025年1月20日、1月30日、3月27日をくりのみ学園利用者や外部の方含めてのイベントとして実施。それ以外の日程でも各自本事業のテーマに合わせた実証実験や商品開発を実施。4つのプランが完成し、今後も検証と実際の設置や販売に向けて継続して行く予定である。

4 事業の成果

- ・くりのみ学園の利用者を中心とした中で、福祉施設の方のできる作業は何があるのか。また、安全性を確保しながら農林業作業が行えるか、それに派生する可能性があるかと



等を検証できた。

- ・各作業で利用者の方が楽しみながら参加してくださっていることは印象的であり、通常とは異なる業務等が刺激になることを感じられた。また野外作業は協働も可能であり、また障害のある方への子どもたちの理解の機会にもなりうる点は強く感じられた。

5 事業実施団体による自己評価



商品化や販売可能なルート（シュタイナー学園の通販サイト）などもでき、実際の商品化が可能になっている。くりのみ学園の入居者の方は作業が難しい方もおり、利用者中心で考えるとメンバーによってできることが変わる等はあるが、作業して販売までの制作が行えそうなことは検証できた。森林の課題の可視化から、福祉施設と連携も含めて、運用ができそうなところは確認できた。商品そのものの安全性を高め、販売の実施を行っていききたい。

6 今後の展望

活動の幅を広げ、観光ルートとしての整備や、藤野観光協会との連携なども実践し、より活動を具体化していく。クラウドファンディングや一部作品などの販売も行い、自走化できるプロジェクトにしていく。



リレートークの会

藤野地区

団体名：リレートークの会

1 事業実施の背景や地域の現状と課題



図書館を考える会は20年以上続いている団体で、これまで「お話を聞く会」を開催してきた。ここ藤野町には、「お話を聞きたい人」がたくさんいるため、事業を継承し、さりげなく気楽に「お話をする会」を設け、「リレートーク」を行う場が必要である。

2 事業の目的

今、藤野には多彩な方々が様々な暮らし方を模索しながら楽しんでいる。そんな人々をリレートークしてより多くの人々に周知してもらおう。藤野には、現在、沢山の『多彩な暮らし方、今までの里山のイメージを超えて、クリエイティブな生き方をしている人達がいる。そして、そうした皆さんの連携した活動が、住みやすい街作りとなっている。』と言った現実を皆さんに知ってもらい、町を活性化させていく。



3 事業の実績

藤野地区で様々な活動をしている以下6名の方による「リレートーク」を実現。
佐藤文男、井上進吾&沙織、綱田富士恵、碓井直弘、小山宮佳江

4 事業の成果

自然環境、福祉、医療、文化、芸術、地域コミュニティの切り口で、藤野地区の昔と今、そして未来について地域住民の方に知っていただく機会を提供できた。

プレゼンいただいた内容は、リレートークの会のWEBサイトで動画・音声を誰でもいつでも視聴可能な環境を設け、貴重な情報のアーカイブ化を実現した。



5 事業実施団体による自己評価



お話しいただいたテーマに偏りがなく、様々な視点から藤野地区の歴史や文化が紐解かれていく機会になった。

各プレゼンターが、写真や動画を用いて説明いただいたため、参加者へ具体的なイメージが伝わっていた。

質疑応答の時間は活発な意見や情報交換がなされていたことも、その場のナラティブを更に深めることに貢献したと思う。

6 今後の展望

スピーカーのお話をQRコード化して、HPにも掲載して藤野町での様々な活動を全国規模で認知していくきっかけ作りになる冊子を作る。（前回は100部で配布）藤野駅観光案内所「ふじのね」に常時置けるようにする。



風の森学び舎～風と水の流れる森づくり

藤野地区

団体名：特定非営利活動法人ふじの里山くらぶ

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

高齢化や若年層の流出により、山や田畑を手入れする人材が減り、藤野地区では荒れた山や藪化した空き地が点在しています。荒れた山は獣害により下草がなくなり、保水力が弱り土砂災害が生じやすい状態になっている。

自然豊かな里山環境を将来に残し、災害に強い山林へと育てていくため、地域住民の日常生活で行える作業（手入れ）方法を藤野地区内へ広く伝播させていきたいと思う。



2 事業の目的



自然環境の再生、鳥獣害の抑制、景観の改善、地域住民による持続的な行動の浸透をする。

3 事業の実績

- ・講座形式：計8回（石井農園2回、沢井川2回、小湊の山1回、佐野川2回、日連1回）
- ・作業日：計14回（小湊の山3回、佐野川4回、吉野4回、日連3回）
- ・小湊の山：登山道と沢の整備、ビオトープ作り
- ・佐野川：放棄地（茶畑、キウイ・ゆず畑）の整備
- ・石井農園：階段作り、小川の整備
- ・吉野：沢と竹林の整備
- ・日連：放棄田んぼの再生

4 事業の成果

- ・小湊の山：鷹取山へ向かう登山道の倒木整理と環境改善
- ・佐野川：放棄茶畑の整備を行い鳥獣害の抑制



- ・石井農園：階段を作り歩行安全性の向上、小川の整備で水の遊び場の提供
- ・吉野：甲州古道の竹林の景観改善、沢と斜面整備で倒木や斜面崩壊の抑制
- ・日連：藪払いを行い田んぼ周辺の景観と環境改善、鳥獣やヒル害の抑制

5 事業実施団体による自己評価



地域の人からのご相談・ご依頼を受けて、新たに吉野・日連の活動場所が加わった。この3年間の継続的な活動が地域の人たちに認知されてきたことを実感している。

少子化や物価高騰が進む中で、いかに人の手で、労力や費用をかけず、日常の暮らしの中に自然の手入れを取り込むか。この考え方ややり方を地域内外へ伝えていくための実績や、プロトタイプを創ることができたのが本年度の大きな収穫だった。

これからも、住民・行政・地域の連携を深め、持続的な環境保全の風土づくりを進めていきます。

6 今後の展望

沢井川の景観・環境改善をまちづくり会議環境部会、沢井地区自治会などと連携して作業実施を予定している。行政、地域住民が連動した環境整備の取り組みモデルに仕上げ、景観改善視点での登山道や河川整備を事業化していきたい。

小淵の山は「防災」をテーマにしたワークショップを開催し、自然災害への備えと対応・対策を啓蒙していく場としていく予定。

佐野川地区は、環境整備箇所の鳥獣害の増減を検証していく場所として活用し、藤野プレーパークとの連携においては家族層への啓蒙活動を継続する。

これらの活動を通して、行政と自治体、住民が連携した環境整備の取り組みを定着させ、藤野地域内の整備箇所を拡大していく予定。

現在は土日のみ稼働だが、平日も稼働できるよう運営人員を増やすことで企業や団体の自然体験・研修の受け入れを目指し、収益力を高めたい。



藤野定期便

藤野地区

団体名：藤野定期便

1 事業実施の背景や地域の現状と課題

里山である藤野には豊かな恵みがたくさんあり、その恵みをもっと活かしていきたい。

また、小規模で有機農作物を育てている農家の農作物を使い、収穫されずに放置されている作物や植物（梅や栗、柚子やハーブや金木犀など）、工芸や手仕事などの技術を持つ地域の人と魅力ある形にし、必要な人に届く消費につなげていきたい。魅力あるプロダクトを生むことが、藤野の魅力を広く知ってもらえるきっかけになると考えている。



2 事業の目的



藤野の農作物を原料にしたり、技術を活かしたコンセプト性とデザイン性を兼ね備えたプロダクトの制作と販売を定期便という形で行う。制作、販売を通じ、農家や工芸作家、デザイナーなど、業種も違う人が関わり合い、協働し、ひとつのものを作り上げることで地域の活性化を目指す。ECサイトやWEBにより、商品を全国に販売宣伝することで、「藤野ブランド」を確立する。

3 事業の実績

昨年度作ったアイテムを新たに製作し販売。新たに地域の生産者や作家にコンタクトを取り始め、製造を担ってくれる方、デザイナー、カメラマンとの打ち合わせを開始。昨年も作っていた地域の藍を使った手織コースター、手製本のノート、草木染めのセルフケアアイテム、ポストカード、キッチンクロス、キッチンワゴン、チャリティークロスなど、藤野定期便として新しい商品をリリースした。各月商品をオーダーしていただき、あわせて280人の方に商品をオーダーしていただき、発送した。

4 事業の成果

藤野という場所の豊かな自然を感じていただけるアイテムを地域で小さな規模で生産、製作している方々と協力しながら行い、全国の方にオーダーいただくことを継続して続けることができた。藤野定期便に興味を持ってくれ、オーダーしてくださった方の中から希望の方



に、実際藤野に来ていただき、製品に関わった人たちと交流してもらったイベントも数回開催したところとても好評だった。イベントには全国から人が参加してくれた。イベントに参加して、藤野に移住を決めた方もいた。

5 事業実施団体による自己評価



生産者や製造を担ってくれる方との出会いを大切に藤野の魅力を感じられるアイテムを作り、そこから藤野という町の多様性、魅力を伝えられる活動ができたと思っている。リピーターの方もとても多く、「買う」「売る」だけではないコミュニケーションが生まれたように感じる。

6 今後の展望

仕入れ費、デザイン費、撮影費などの経費が一回のサブスクリプションで14万円ほどになるため、毎月3,000円のサブスクリプションの顧客50人以上を獲得することで、回収できるように目指す。また、広報活動に力をいれ（SNSなどを積極的に活用）、100人以上の顧客獲得を目指す。



緑区地域活性化事業交付金 事業評価一覧表

【評価方法】

○評価者1名につき24点満点とし、評価者3名の場合72点満点とする

○評価者のうち1人1項目でも0点がある場合はC評価とする

○得点による3段階評価

評価者数	3名	4名	5名
A評価	65点～72点	87点～96点	108点～120点
B評価	29点～64点	39点～86点	49点～107点
C評価(交付終了)	0点～28点	0点～38点	0点～48点

NO	地区	事業名	団体名	継続年数	評価者	公共性	妥当性	継続性・自立性	波及性・発展性	目標設定	地域性・独自性	合計点	評価	総括コメント
1	橋本	コミュニティカフェ(地域食堂)	かまどカフェ	2	3人	12	11	11	9	10	9	62	B	地域の集いの場としてコミュニティカフェを運営して2年目となり、参加者も増えており、安定的な運営もできていることから、地域の活性化に寄与している。
2	橋本	おもちゃの広場による多世代交流	おもちゃの広場はしもと	2	3人	11	11	7	7	8	8	52	B	活性化交付金を利用して多世代交流を目的に活動を続けており、地道な活動を通じて少しずつでも参加者が増えてきていることは、地域の活性化に寄与している。
3	橋本	福祉カーニバルin橋本	福祉カーニバルin橋本実行委員会	1	3人	9	9	7	9	9	9	52	B	初めてのイベントにも関わらず多くの人に協力、参加してもらい、開催できたことは大いに評価できる。今後も定期的な開催に向け課題の解決に取り組み、次に繋げてほしい。
4	橋本	「相原地区の文化財めぐりマップ」及び「相原の歴史」の復刻版(一部加筆)事業	相原の歴史をさぐる会	2	3人	9	11	7	7	9	10	53	B	本事業による歴史資料の作成は、将来への文化、伝統を残すものであり、地域の文化振興に寄与している。
5	橋本	健康づくり普及活動運動	健康づくり普及活動同好会	1	3人	11	10	7	7	9	9	53	B	認知症予防、介護予防を目的に活動を始め、自治会の協力も得ながら、1年目から多くの参加者で活動できていることは、地域の活性化に寄与している。
6	大沢	「大島水場のヤツボ」バリアフリー化事業	水場ヤツボを守る会	1	3人	8	8	6	6	7	8	43	B	水場ヤツボを守る会の清掃活動をはじめ、見学者の安全性が高まったことは大いに評価できる。
7	城山	しろやま土曜寺子屋活動	しろやま土曜寺子屋実行委員会	1	3人	8	7	6	7	7	7	42	B	「地区内の子どもたちへの学習支援を行う」という目的については、一定の成果があったものと思われるが、「地域の絆づくり」「大人同士のコミュニケーションづくり」という目的については今後の拡充の余地があると考えます。次年度は、事業目標の達成に向け、さらに検討、工夫を重ねた上での取組に期待したい。

NO	地区	事業名	団体名	継続 年数	評価者	公共性	妥当性	継続性 ・自立性	波及性 ・発展性	目標 設定	地域性 ・独自性	合計点	評価	総括コメント
8	城山	若葉台を含む城山地域の防災・減災プロジェクト①	若葉台住宅を考える会	1	3人	9	9	6	9	8	9	50	B	さまざまな体験を通じ、地域の住民の防災意識を高める事業として一定の成果が得られたと思われるが、開催場所が若葉台であったこともあり、活動内容が城山地区全域に知れ渡っているとは言い難い。今後は、周知や開催方法等、検討を重ねていただき、城山地区全域に活動の輪が広がっていくことを期待する。
9	城山	みんなの津久井湖夏祭り	みんなの津久井湖夏祭り実行委員会	2	3人	11	10	11	12	10	10	64	B	祭り自体が3回目ということもあり、実行委員が増え、また、ボランティアも増やすことができており、着実に事業運営ができているものと考ええる。自己資金についても協賛者を増やすなど、自走するための足がかりもできてきており、「城山地区の祭り」として定着しつつあると感じる。今後も、地域コミュニティ強化の一助として、若い世代の担い手が増え、充実していくことを期待するとともに、城山地区の観光振興及び知名度向上につなげていただきたいと思っている。
10	城山	しろやま☆おせっかい	城山地区まちづくり会議 高齢者とともに築き支える地域づくり部会	3	3人	9	8	7	7	9	9	49	B	各地区をウォーキングして、おせっかい事例を参加者同士で共有し、スゴロクに落とし込み、仕上げられたことは、「おせっかい風土」の醸成につながったものと考ええる。今後も途切れることなく続けていき、城山地区内に「おせっかい風土」を広めていただきたいと思う。
11	城山	あつまれ～ しろやまっこ！	城山地区まちづくり会議 子どもたちの主体性を育む地域づくり部会	1	3人	9	8	6	8	7	10	48	B	モルックというスポーツで遊びながら、他校の子どもだけでなく、大人とも交流を図ることができ、また、大人同士も新たなコミュニケーションを図ることができ、一定の成果があったのではないかなと思う。今回のアンケート結果を活かし、子どもの主体性を育むという事業目標達成に向け、今後はもう一歩発展した事業になってくれることを期待する。
12	津久井	米・大豆等の栽培で持続するまちづくりを目指す事業	農園会	3	3人	9	9	9	10	7	10	54	B	活動を通して地域などの連携団体との協働体制が図られ、米作りなどの作業を通じて地域コミュニティづくり及び関係人口の拡大に寄与できた。令和6年度は獣害により酒米等の収穫がなしに終わったことは残念であるが、地域の方との連携によりすぐに対策を講じるなど、地域コミュニティの醸成において一定の成果があったと評価できる。
13	津久井	自然災害伝承事業	自然災害伝承碑「地震峠」を守る会	3	3人	11	9	11	12	11	11	65	A	周辺地域の生徒・学生と共に本事業へ取り組まれたことは、若年層への継承にも繋がり評価できる。また、取組が新聞などのメディアに取り上げられたほか、国土交通省の目にとまるなど、この事業を通じて多くの人が災害の実態を知り、防災について考えるきっかけを作ったことは大いに評価できるものである。
14	津久井	津久井湖周辺創生事業	津久井湖周辺創生実行委員会	1	3人	6	7	7	9	6	9	44	B	鯉のぼり掲揚の実現に向けて、視察研修により目指す方向性を検討するなどの事業を実施したが、具体的な方法などは打ち出されなかった。令和7年度以降については、関係する団体や行政などを巻き込み、掲揚に向けた具体的な方法の検討や概算費用の算定など、成果が目に見えるものとなるよう期待したい。

NO	地区	事業名	団体名	継続年数	評価者	公共性	妥当性	継続性・自立性	波及性・発展性	目標設定	地域性・独自性	合計点	評価	総括コメント
15	相模湖	わくわく・さがみこ創り	相模湖地域連絡会	3	3人	7	7	11	10	9	11	55	B	3年間にわたり継続して与瀬神社の遊歩道への桜の植樹や相模湖ハロウィン等を行い、地域の活性化、課題解決に寄与している。来年度以降も活動を継続し、相模湖地区の活性化、課題解決に努めてほしい。
16	相模湖	小原地区元気いっぱい花いっぱい環境整備事業	小原草木会	1	3人	10	10	12	8	10	8	58	B	今現在小原で進めている、中山間地域振興モデル地区の取組と併せた、魅力の創出・発信を進めていく事業であり、地域のPRのためにも継続して取組を行ってほしい。
17	藤野	FUJINOコミュニティ・フォト・プロジェクト	FUJINOコミュニティ・フォト・プロジェクト	1	3人	6	6	9	8	9	9	47	B	取材した地域住民と交流をすることにより、素の姿を撮影できている。藤野地域や伝統を写真に残し、展示することにより、多くの方に藤野の文化を知ってもらえることは評価できる。
18	藤野	藤野お惣菜地美恵	藤野お惣菜地美恵	1	3人	7	6	8	6	6	6	39	B	栄養価が豊富なジビエを食肉としての活用、安全性を学びながら活動している。地域住民の参加者も多く評価できる。
19	藤野	葛原集会所前休憩所改修工事	葛原有志の会	2	3人	9	9	9	8	10	9	54	B	地域住民や登山客が利用していた休憩所の修繕したことにより、より安心して利用できる休憩所となった。また、休憩所周辺環境を整備することで、葛原地域が安心して訪れられる空間となったことは、当会の活動の実績と考える。
20	藤野	赤沢環境整備プロジェクト	上野久保 杜を守る会	2	3人	9	9	6	6	9	9	48	B	この活動により、崩落斜面の修復だけでなく、沢の整備等を行い、森の環境が改善されていることは大変評価できる。
21	藤野	しのばら園芸市	しのばら園芸市実行委員会	2	3人	9	9	9	9	9	9	54	B	SNSによる情報発信により、市外からのイベント参加者が増えており、地域のPRに繋がっている。また、地域及び大学生と連携し、環境整備活動等を行っていることは評価できる。
22	藤野	藤野農林福藝連携プロジェクト基盤整備	藤野農林福藝連携プロジェクト	3	3人	9	8	9	7	8	8	49	B	福祉施設と連携し、イベント開催や商品開発を行い、農林作業については参加者自らが楽しみながら作業しており、大変評価できる。
23	藤野	リレートークの会	リレートークの会	3	3人	6	6	9	6	9	6	42	B	藤野地区で活躍している方の話を聞くことで、今日までの藤野の歴史やスピーカーの生き方を学ぶことができ、自身の生活に活かすことができる。また、HPを通して、地区内外に発信することで、広く藤野をPRすることができる。多彩な方が藤野に住んでおり、活動的なまちであることを認知してもらう取組は評価できる。
24	藤野	風の森学び舎～風と水の流れる森づくり	特定非営利活動法人 ふじの里山くらぶ	3	3人	9	9	7	8	8	9	50	B	活動を通して、他団体や地域事業者と連携して山の整備ができ、生物多様性の環境も回復できていることは評価できる。
25	藤野	藤野定期便	藤野定期便	3	3人	6	6	8	7	8	6	41	B	地元で生産されている材料を使って定番商品から新商品を制作し、藤野の魅力とともに発信し、商品購入者を招待したイベントを数回開催している本事業は、地域活性化に資する事業と言える。



令和 6 年度実施

緑区地域活性化事業交付金活用事例集

編 集

緑区各まちづくりセンター

発 行

相模原市 緑区役所 地域振興課

相模原市緑区西橋本 5 - 3 - 2 1

電話 042-775-8801